二見鏡三郎博士の追悼會と博士の人物

昨年の二月十日に工學博士二見鏡三郎氏の逝去された事を知つてゐた人は實に少い、それだけ二見博士の晩年は靜かなものであつた。

○

約二十年前に雜誌「工學」が創刊されて以來、工學誌上を通じて二見博士を知つた人は多數あつたが京大の名譽教授として多數の門下を教育された博士としては晩年が餘りに淋しい樣だつた。社會と言はず我が工學技術界は斯る大先輩の追憶に餘りに冷淡な樣である。

○

幸にして本年二月九日東京驛ホテルに於て、二見博士の一週忌追悼會が催され、京大からは瀧山、高橋、近藤、澤井等の諸教授が列席され、東京方面に於ける知名の技術家五十餘名も參列されたのであつた

○

二見鏡三郎博士は溫厚なる學者であつたが、特に目立つた處は『性格が純眞で一點の曇もない、殆んど聖人に近い人であつた。人間にも斯んなにまで良い人があるか、と不思議な位の善人であつた』と云ふ點は二見博士の知友の言として衆口一致した點である。

○

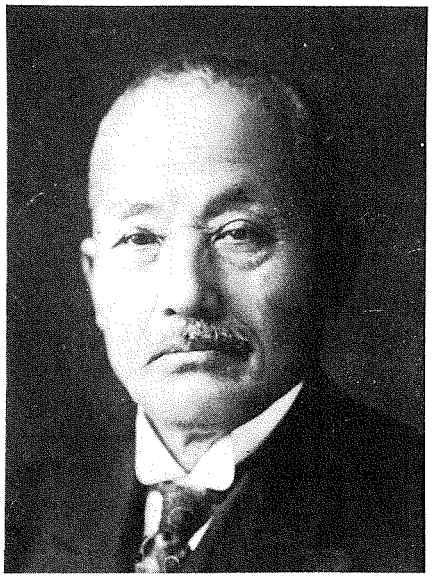
二見博士は安政三年九月生れ三河國掛川の藩士であるが、幼にして父を失ひ、母堂の手で養育され、生活も樂ではなかつた。此の點は廣井勇博士の幼年時代と似たものである。然し貧乏は必ずしも其才能を埋木にするものでない。博士は一生を通じて殆んど赤貧と云ふに近い生活を續けられたとの事であるが學問研究の爲には甚しく不自由はなかつたらしい、それは青年時代に早くも自費を以て米國へ留學された事を見ても知られる。

○

二見博士は明治十二年東京大學理學部土木科を出た理學士であつた。明治十三年內務省地理局へ入つたが、十七年に同局が陸軍へ移つて陸地測量部となつたので博士も陸軍へ轉じた。而して博士は四十ケ年計劃で日本の完全なる地圖を大成するの案をたてゝゐた。恐らく其の遠大な計劃が今日の陸軍の完全なる地圖となつて我々に至るまで多大の便宜を得てゐるのである。其當時の山岳測量は中々困難な仕事で飲食物の不便な山中で一ケ月も過す樣な事もあつたとの事である。

○

明治十九年から工科大學の助教授を兼ねたが、二十一年には自費で渡米し、工學技術の實地を研究してゐる中に例の親日家の工學者バー教授と知り合になつた。二十三年歸朝して、一、二年の間は大阪鐵道會社や、神鶴電氣鐵道會社等に關係して線路の調査設計に當つた。



故、二見鏡三郎博士

○

明治二十五年には福井縣の技師となつて、其頃としては有名な九頭龍川の改修計劃に當つた。二十八年京都の第三高等學校の教授となり、同校專門部で土木學を教授した、東京市の前水道局長小川織三氏などは當時二見門下の學生であつた。三十年に京都帝大が出來たので、其理工科の教授となり、土木工學を教へた。

○

明治三十二年工學博士の學位を授與され、三十六年には歐米出張を命ぜられた。而して停年辭職後は名譽教授として尙ほ關係され、京都帝大の爲に前後實に三十年間工學教育の爲に、我を忘れて盡力された。其間博士の教化を受けた人で、我國土木技術界に有力なる働をしてゐる學者技術家は數百人に及んでゐる。

○

二見博士の著書としては雜誌工學に連載され、後に一册に纏められた『鋼拱橋と鐵筋混凝土拱』がある。此著は恐らく我國の先覺的著述の一であらう。

○

趣味としては草花造りが好きで、特に菊や朝顏を丹精した。晩年には東京の令息の宅に移り、學士會館などへ出掛けて將棋に親しむのが唯一の樂みであつた。

二見博士には三男一女があり、長子貴知雄氏は法學士にて日銀に、次子武雄は醫學士、三男秀雄氏は東京工業大學の建築科助教授である。